



〈第 51 回例会〉映画上映会(シアターキノ)

『敬愛なるベートーヴェン』

～「第九」とアンナ、そしてポーランド派ホラント～



三浦 洋

新作の映画『敬愛なるベートーヴェン』(2006)は、制作国がイギリスとハンガリーですが、監督のアグニェシカ・ホラントはポーランド人の女性監督です。パンフレットには「アニエスカ・ホラント」と書かれています。ポーランド語の発音に従ってアグニェシカと書きます。

私はこの作品を昨 2007 年 11 月に試写会で見たのですが、まず理屈抜きに面白い映画です。ストーリーの骨格は、ベートーヴェンが交響曲第九番、つまり「第九」を初演する4日前に、アンナ・ホルツという 23 歳の女性が写譜役として音楽出版社からつかかわれるところから始まります。作曲の心得があるアンナは次第にベートーヴェンに意見をいう女性になってゆき、「第九」の初演を助ける、という展開です。映画のクライマックスは、アンナの助けを借りてベートーヴェンが「第九」初演を指揮するシーンです。この筋書きはほとんどフィクションのようで、アンナは架空の女性ですが、「第九」の写譜師は三人おりまして、その三人目の人物は未だに謎なのだそうで、ホラントはそこに目をつけ、アンナという女性を造形したようです。

では、実際の「第九」初演はどうだったのかといえますと、ベートーヴェンの研究者であった山根銀二の著書によれば、難聴ゆえに演奏終了に気付かなかったベートーヴェンを客席に振り向かせたのはウンガーという女性歌手だったそうです。しかし、この映画ではこの女性をアンナに変えて、思いもよらない面白い物語を作ってみせてくれます。

さて、ここからが本題ですが、この映画は三つの見方ができるのではないかと思います。一つには、「第九」を中心に晩年のベートーヴェンを描いた映画という見方、二つめには作曲家を目指すヒロイン、アンナを描いたストーリーという見方、そして三番目には、アグニェシカ・ホラントが女性映画監督として、また、現代映画のポーランド派としての誇りをかけて撮った作品という見方です。

1. ベートーヴェンの人物像と晩年の作風

一つめの、ベートーヴェンを描いた映画という点では、1994 年にアメリカで制作された『不滅の恋ベ

ートーヴェン』と比べることができます。二つの映画の共通点は、ベートーヴェンを聖人君子扱いせず、俗人としてといますか、むしろ変人として描いている点です。果たして本当のベートーヴェンはどんな人だったのか、正確には誰もわからないわけですが、『敬愛なるベートーヴェン』では、芸術家の魂と俗人ぶりを併せ持つ人物をエド・ハリスが見事に演じています。ハリスはもともとスマートな俳優ですが、ベートーヴェンの役を演じるためにわざわざ特別の食事をつづけて太り、その上でピアノ、ヴァイオリン、指揮、楽譜を書く練習までして撮影にのぞんだそうです。ホラントの映画には何度も出演しているハリスですが、ひとときわ力のこもった演技になっています。

それから、ベートーヴェンの音楽という点では、『不滅の恋』のほうでは名曲のオンパレードという感じだったのに対し、『敬愛なるベートーヴェン』のほうでは「第九」以外に、ベートーヴェンが最晩年に作った風変わりな作品がエピソードをまじえて演奏されます。たとえば、最後のピアノソナタ第 32 番や、とても長いフーガを持つ弦楽四重奏曲第 13 番、七つの楽章がつづいて演奏される第 14 番などが映画に出てきます。これらの作品は初演の時から決して評判がよくなく、変わった作品とされていたようで、ロシアの作家オドエフスキーが「ベートーヴェンの最後の弦楽四重奏曲」という短編の中で取り上げています。実は、この短編が含まれている『ロシアの夜(ルースカヤ・ノーチ)』という短編集を、私は学生時代に故・灰谷慶三先生のご指導を受け、ロシア語で読んだことがあります。そのとき特に印象に残ったのは、オドエフスキーがベートーヴェンになり変わって、「悲しければ悲しいほど、私は減七の和音を付け加えたいのです」という台詞を書いていたことです。音楽にくわしかったオドエフスキーは、当時なかなか理解されなかったベートーヴェン晩年の作風を作曲家になりかわって説明してくれているわけです。映画の中ではベートーヴェンが作品を酷評されるシーンもでてきますが、晩年の作風について考えるヒントを与えてくれます。

そして、もう一つ、映画の軸になっているのが、

ベートーヴェンが溺愛していた甥のカールとの関係です。甥のカールとは、ベートーヴェンの弟カール(名前が同じなのでややこしいのですが)の子どもです。ベートーヴェンは弟が亡くなったときに、弟の妻であった女性と4年にわたる裁判までして甥のカールを奪い合いました。結局、裁判ではベートーヴェンが勝ち、カールを引き取ったのですが、カールとベートーヴェンの関係は決して良くなく不和がつづきました。この事実がストーリーに巧みに盛り込まれています。

2. 作曲家を志す女性、アンナの魅力

さて、今度は二つめの、アンナを描いた映画という見方についてお話しします。おそらくアンナはまったく架空の女性ですが、映画の中ではとてもリアリティのある存在です。とくに忘れられないのが、ベートーヴェンがアンナに対して「女が作曲するなんて犬が逆立ちして歩くようなものだ」というシーンや、アンナが「私は乳母や掃除婦や売春婦によくまらぐえられる」と叫んで、悔しさを訴えるシーンです。作曲の才能をもったアンナにとって、女性がさげすまれる社会状況は耐え難いものであり、この映画の随所にフェミニズムのまなざしが感じられます。

実際、クラシック音楽の歴史の中では、マーラーの妻アルマやメンデルスゾーンの姉ファニーらが、作曲の才能を持ちながらも女性であるゆえに認められにくかったといわれています。日本でも作家、幸田露伴の妹・幸田延が困難な人生を歩んだといわれます。

しかし、この映画は決してフェミニズムを声高に叫ぶ作品ではなく、アンナの姿は理想化されていません。アンナは作曲家になりたいと願いつつも生き方に迷い、なかなか主体的に人生を切り開いていきません。そんな彼女の姿にもどかしさを覚える方もおられると思いますが、私はここに、ホラントがポーランドの映画監督、クシシュトフ・ザヌーシから受けた影響を感じます。ザヌーシの映画たとえば『太陽の年』や『巨人と青年』には逆らえない運命の中に生きる人物たちが出てきますが、このようなザヌーシ的な視点をホラントは保持しつつ、アンナに限りない共感をこめて描いているように思います。

少々話が難しくなりましたが、私はダイアン・クルーガー演ずるアンナという女性が実に魅力的に感じられます。アンナはドイツ人という設定ですが、知的で誇り高く、勤勉で、しかもチャーミングな彼女こそポーランド人女性の典型にみえます。ポーランド人に比較的多い「アンナ」という名前が彼女に与えられていることにも起因するかもしれません。

ここで、キュリー夫人を挙げますと、彼女はポーランド人で、本名をマリア・スクウォドフスカといいます。大変勤勉で魅力的な女性だったそうで、私にはアンナとキュリー夫人ことマリアがだぶってみえます。たまたまこの1ヵ月ほど新聞に「ポロニウム」という物質がまるで毒薬のように書かれています。この「ポロ」というのはポーランドのことで、発見したキュリー夫人ことマリア・スクウォドフスカが祖国ポーランドにちなんでつけた名前なのです。ポーランド人びいきの見方をしますと、貧困の中で研究に打ち込み、女性として初めてノーベル賞を受賞したキュリー夫人の姿こそ、ホラントがアンナを造形した遠いモデルになっている気がします。

その意味で、この映画は女性監督のホラントが女性の誇りを描いた映画といえます。ホラントは『太陽と月にそむいて』(1995)という作品で詩人ランポーとベルレーヌを描きましたので、芸術家をあつかった作品という点で連作にみえますが、今回のストーリーはヒロインのアンナにかなりの比重がありますので、そこが違いといえます。

3. ホラントのポーランド派らしさ

さて、ホラントの映画という三番目の見方に移りますと、アグニェシカ・ホラントは長らく脚本家としてポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダとともに作品を世に送ってきた人です。たとえば『ダントン』(1982)、『ドイツの恋』(1983)、『悪霊』(1987)など、「連帯」運動でポーランドが目ざされていた80年代の作品がそうです。

ポーランドはショパンに代表される音楽の国であるとともに映画大学をもつほどの映画の国でもあり、カヴァレロヴィチ、ポランスキ、ケシロフスキ、ザヌーシなど名立たる映画監督を多数輩出してきました。それは、ポーランドがルネサンス以来、演劇を発展させてきた国であり、名優を生んできた歴史が映画に受け継がれているからです。ショパンが学んだ音楽学校も前身は演劇学校の音楽部門でした。ポーランドでは、演劇を母とする映画と音楽は双子の生まれということになります。

ホラントはハリウッドやフランスでも映画を制作している人ですが、ポーランド派の映画監督だと実感される理由がいくつかあります。

一つは先ほど運命論の話をしたザヌーシからの影響です。ザヌーシの『巨人と青年』という作品では老作曲家と音楽学生が夢を通して不思議な出会い方をしますが、どこかベートーヴェンとアンナの出会いに似ていますので、『敬愛なるベートーヴェン』のヒントになっているのかなという気がします。

また、状況を想像させながら登場人物をうつしだしていく手法はワイダの映像を想起させます。

このようなことからホラントをポーランド派の映画監督と考えますと、一つ興味深いことがいえます。それは、ポーランド人がドイツの芸術家ベートーヴェンをたたえた作品をつくったということです。一見なんでもないことのようにですが、ご承知のように第二次世界大戦はナチス・ドイツがポーランドに侵攻したときから始まったわけで、それ以前の歴史においてもポーランドはドイツから侵略を受けていましたので両国の関係は歴史的には良好ではありません。ベートーヴェンの「第九」にしても、ナチスが国威発揚の機会に好んで演奏した音楽でした。したがって、ベートーヴェンやドイツをたたえるのはポーランド人にとってタブーのような雰囲気があり、私の知る範囲でも、たとえばショパンがベートーヴェンやシューベルトから影響を受けていることを主張するのはタブーのような雰囲気が 20 世紀のショパン研究にはあります。それを考えますと、ベートーヴェンを描いたこの映画はポーランド派にとって画期的でもあります。

ちょうど今年ドイツでノーベル賞作家のギュンター・グラスがナチス親衛隊に属していたことを告白し(8月 12 日)、元ポーランド大統領のワレサ氏がグラスの「グダニスク名誉市民」称号剥奪に一時動

いて話題になりました。グラスの母親はポーランドの少数民族カシューブ人で、映画にもなった小説『ブリキの太鼓』の舞台は、「ダンツィヒ」と呼ばれていた頃のグダニスクです。グラスの例が示すように、隣の国でありながらも複雑な関係を持つポーランドとドイツを念頭におきますと、この『敬愛なるベートーヴェン』は、少し大げさですが、両国の今後の関係を予感させる作品なのかもしれません。

もう一度、話をワイダに戻しますと、ワイダとホラントの関係は、ちょうどベートーヴェンとアンナの関係に重なっても見えます。アンナが「私はベートーヴェンに仕えているのではなく、共同制作しているのです」と誇らしげに語るせりふは、ホラント自身のせりふとして受け止めるとき実感がこもっています。

何よりも、ホラントがワイダやポーランド派の流れをくむ監督であることを示す映像が冒頭にてできます。それは、「白い馬」です。ワイダのファンの方ならすぐに、あ、あの白い馬だ、と気づかれると思います。古くはワイダの名作『灰とダイヤモンド』にも、そして一番新しくは『パン・タデウシ物語』にも出てくる白い馬が『敬愛なるベートーヴェン』にも出てきます。この白い馬はポーランドの象徴で、ホラントは意識的に冒頭で白い馬を使い、ポーランド派として名乗りを上げているのにちがひありません。

クロード・ランズマン



『ショアー』のランズマンから見た ワイダの『コルチャック先生』と ホラントの『僕を愛したふたつの国』

小原 雅俊

かつて、ワルシャワ・ゲットーに閉じ込められた 200 人の孤児たちとともにトレブリンカの絶滅収容所で殺されていったヤヌシュ・コルチャックを描いたアンジェイ・ワイダの 1999 年カンヌ映画祭出品作品『コルチャック先生』に対して、翌年、フランスのユダヤ系知識人の間で、「記憶の帝国主義」「キリスト教による私物化」といった批判が投げかけられた。映画の幼い少年の頭上に現れるキリスト教の図像である光輪とキリストの贖罪と天国の比喩と解された映画の最後のシーン——トレブリンカに向かう輸送列車からコルチャックと子供たちを乗せた車両が離れ、スピードを落とし、草原で停まり、子供たちは、表に

ダビデの星が、裏に四つ葉のクローバーが描かれた旗を掲げて、まるでピクニックに来たのでもあるかのように嬉々として靄のかかった草原に駆け出すのである¹⁾。もちろん、字幕では彼らがどのようにして殺されていったかが伝えられる——が、ワイダがコルチャックを、ユダヤ人を救うキリスト教の聖者として描いたと非難される主たる根拠となったようである。

映画『ショアー』の監督クロード・ランズマンも *Sommaire* 誌の対談の中で²⁾、ワイダの『コルチャック先生』は「悪意ある反ユダヤ主義的な映画だ」と激しく非難した。ランズマンはここでも、ユダヤ人の絶滅には、最後のシーンで語られるような慰めはな